

京極読書新聞

<第93号>

発行日 平成29年10月1日(日)
京極町生涯学習センター湧学館

平成29年9月16日(土) ～後志バスの旅2017～

「小樽の歴史的建造物・文化財めぐり」



今年の「バスの旅」は、午前9時過ぎに総勢23名で湧学館を出発しましたが、一日中青空のもとで気持ちよく実施することができました。また今回は趣を変え、今までの主に文学に関連したコースではなく、小樽の歴史的建造物と文化財を見学するコースといたしました。小樽には歴史的建造物や有形・無形の文化財が合わせて90以上ありますが、その一部を巡るバスの旅でした。

今回の見学場所は大きく三つの地区に分けることができます。一つ目は色内地区で歴史的建造物の10棟を見学しました。この地区は明治後期から昭和の戦前にかけて、本州資本の大手銀行や商社が支店を構えたビジネス街でした。それらの社屋として建てられた豪壮な建築物が今も多数残っており、小樽の見どころの一つとなっています。そうした街の様子から、いつしか「北のウォール街」というフレーズが生まれ、この地域を紹介する際の常套句として広まっています。これらの建物を旧名称で紹介し、日本銀行小樽支店、第一銀行小樽支店、百十三銀行小樽支店、名取高三郎商店、三菱銀

行小樽支店、北海道拓殖銀行小樽支店、三井銀行小樽支店、越中屋ホテル、北海道銀行本店、三井物産小樽支店です。

二つ目は祝津地区の鯉漁に関連の深い施設で、小樽貴賓館、旧青山別邸、小樽市鯉御殿、祝津パノラマ展望台を見学しました。祝津の漁場は江戸時代の慶長年間から松前藩の管理下にあり、宝暦3年(1753)には近江商人の西川伝右衛門が場所請負人になりました。明治2年に場所請負制度が廃止になると、民間に土地と漁場が分け与えられて、祝津では青山家、白鳥家、茨木家が出現しました。祝津の鯉漁は明治33年の漁獲量をピークに、衰退の歴史を刻むことになりました。

三つ目の手宮地区には国指定の史跡や、国指定の重要文化財があります。慶応2年(1866)に手宮洞窟の岩壁に文様が発見され、いわゆる手宮古代文字として一躍、内外に知られるところとなり、大正10年に国指定史跡となりました。昭和44年に国の重要文化財に指定された旧日本郵船株式会社小樽支店は、ポーツマス条約に基づく日露の樺太国境画定会議が開かれた場所として有名です。その他、明治13年、手宮と札幌間に国内で3番目、道内で初めての鉄道が敷かれましたが、現存する国内最古の機関車庫を含めた旧手宮鉄道施設が、小樽市総合博物館の敷地に残されており、平成13年に国指定の重要文化財となりました。



京極読書新聞は
毎月1日発行予定です

紙面の都合上、全施設の紹介とはなりません
が、以下主な施設について皆様に紹介いたします。

【旧日本銀行小樽支店】

明治45年に建築されたこの建物は、歴史的建造物が並ぶ色内地区にあって、その大きさや荘厳さにおいて格別な存在感を示しており、小樽を代表する建築物です。現在、中は金融資料館となっており、日銀小樽支店の歴史や、貨幣の移り変わりを見ることができます。一番奥の大金庫の中で、一億円分の札束のレプリカを実際に手に持つことができました。



【旧青山別邸】

鯨漁で財を成した青山家の二代目・政吉が大正6年から6年半をかけ、お金に糸目をつけずに贅を尽くして建てた別邸です。190坪の建物内の随所に手彫りの彫刻が施され、ふすま絵は狩野派の流れを汲む絵師たちが腕を奮い、絢爛豪華な造りとなっています。鯨漁家の栄華を留めるこの遺構は、平成22年に国の登録有形文化財に指定されました。



【手宮洞窟保存館】

手宮洞窟の彫刻をめぐる文字説、記号説、絵画説などの諸説があり、いまだに結論を得ていません。しかし、昭和20年代後半に余市のフゴッペ洞窟が見つかり、さらに二つの洞窟内の彫刻に似た岩壁画がロシア、中国、朝鮮半島で発見されたことから、現在、手宮洞窟は、北海道と北東アジアとの交流を示す貴重な遺跡と考えられています。



【旧日本郵船株式会社小樽支店】

明治39年に日本郵船(株)が、約六万円を投じ小樽支店として建てました。創建直後には、前述の国境画定会議が開かれました。昭和31年に小樽市が日本郵船から譲り受けて、博物館として再利用しましたが、現在は、内部の各所に明治期の華やかな技術が施された、優れた文化遺産として、多くの観光客が訪れる人気のスポットになっています。



“壇の浦合戦”を考える(2) —平家の敗因をめぐって—

『平家物語』を読む会 村山 功一

平家敗因の諸相

一般に壇の浦合戦での平家の敗因といえば、“潮流の変化”と答える人が多いはず。それほど、単純明快でそれなりの説得力もあることから、古くから多くの人々に受け入れられてきました。果たして、その通りなのか……ということについて、これから検討してみます。

その前に、『平家』本文から、敗因と関わりそうな部分を抜き出しておきます。

- i <門司、赤間、壇の浦はたぎりておつる塩なれば、源氏の舟は塩にむかうて心ならずおしおとさる。平家の舟は塩におうてぞ出(い)できたる> (巻十一「鶏合壇浦合戦」)
- ii <阿波民部重能(あはのみんぶしげよし)は、この三が年があひだ、平家によくよく忠をつくし、度々(どど)の合戦に命を惜しまずふせぎたたかひけるが、子息田内左衛門をいけどりにせられて、いかにもかなはじとや思ひけん、たちまち心がはりして、源氏に同心してんげり> (同「遠矢」)
- iii <さる程に、四国・鎮西の兵者共(つはものども)、みな平家にそむいて源氏につく。いままでしたがひついたりし者共も、君にむか(つ)で弓をひき、主に対して太刀をぬく> (同上)
- iv <源氏の兵者共、すでに平家の船に乗りうつりければ、水手梶取(かこかんどり)ども、射ころされ、きりころされて、舟をなほすに及ばず、舟そこにたはれふしにけり> (同「先帝身投」)

1. 潮流変化敗因説

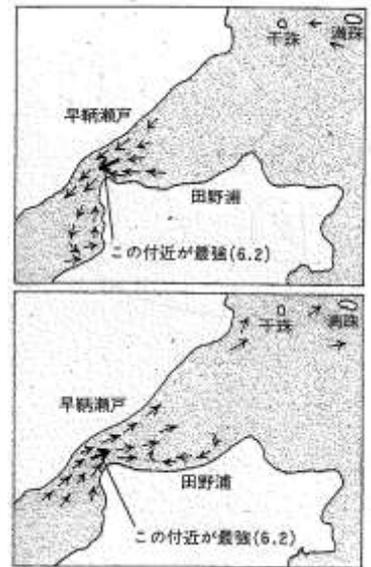
i が最もポピュラーな“潮流説”の根拠ですが、本文では上に見るようにわずかこれだけしか書かれていません。それにもかかわらずこの説が近代以降もなお多くの人々に支持されているのは黒板勝美(以下、人名の敬称を省略)東大教授が



◀ 図-1 壇の浦合戦推定図(黒板勝美『虚心文集』)による

大正8(1919)年に発表した論考によるところが大きいようです。黒板は、海軍省水路部(当時)のデータを基に合戦当日の潮流・潮速を、東流・西流ともに最大8ノット(時速約15km/h)と推定しています。その結果、午前中は東流に乗った平家勢が有利に合戦を進め、午後逆転した西流に押し流されて敗北したと主張しています。

しかし、その後研究が進みこの説は否定されます。その代表が海上保安大学校教官金指正三です。コンピュータを用いて“小潮期”に当たる合戦当日の潮流・潮速を計算した結果、東流の最大が1.8ノット、西流最大が0.9ノットだったと述べています。このそれぞれの数値は最も潮の流れが激しい早瀬(はやとも)の瀬戸のもので、合戦の主戦場はそこよりはるか東方の広い海面であるから、潮流・潮速の影響は殆どないと、黒板説を否定しています。また、気象学者の荒川秀俊は当日の最大流速を0.6ノットと推定し、船舶史家の石井謙治は“相対速度理論”により、同じ潮流に乗る船の速度は変わらないと、潮流・潮速変化による平家敗因説を否定しました。



▲ 図-2 早瀬瀬戸の大潮期の平均流速(金指正三「NHK歴史への招待6」)所収

ただし、金指はたとえ微弱な潮流であっても、当時の漕船(手漕ぎの船)に全く影響しない訳ではないと指摘しています。そのとおりだと思います。潮速が船のスピードに影響しない(相対速度)としても、船を漕ぐためのエネルギーは潮に乗った方は少なく、潮に向かう方が多く費やされるので、それぞれ多少の有利不利の違いは生じるだろうと思います。しかし、それが合戦の勝敗を分けるほど重大な要因になるとは考えられません。

こうして、何となくロマンを感じさせる“潮流説”も現在では否定的見解が大勢を占めるに至っています。

(以下次号)

小樽の街歩きに！ おすすめ図書紹介



「小樽散歩案内」
(有)ウィルダネス 編集

地元目線で街のすみずみまでを案内する、とびきりディープな小樽ガイドブック。有名観光地だけでなく、街なかの隠れた見どころまで詳しく紹介するほか、歴史やさまざまな雑学にまつわる読み物も豊富に掲載。読み応えたっぷりのガイドブック。

「小樽さんぽ 1・2」
田口 智子 著 北海道新聞社 発行

小樽だいすきな著者が、地元のライターだからこそ知っている店や穴場を紹介。樽っ子も、そうでない人も、小樽のまち歩きがもっと楽しくなるガイドブック。小樽のフリーペーパー「kazeru」掲載の人気コーナーを単行本化。

★湧学館で貸出
できます。どうぞ
ご利用ください。



秋の観光シーズン、今回紹介した場所や上記のガイドブックを参考にしながら、「小樽めぐりツアー」を計画してみたいかがでしょうか。

もちろん小樽以外に、道内・道外・海外のガイドブックもありますのでお問い合わせください。

旧青山別邸にて ▶



発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.jp>

